



闇の中の私

〈京都府〉

小谷 英子 54歳
こたに えいこ

私はスーツケースの中、ふたがゆっくり閉められる。「わああー」。自分の声で目が覚める。あー夢か。ここは病院。

私は、道を横断中、バイクにはねられた。体が一瞬宙に浮き地面にたたきつけられた。肩・肋骨・腰・骨盤・足の骨折でベッドから動けない患者になった。「あの夢は、今の私?」。尿の管を入れオムツをして、1人では寝返りもできない。事故に遭う前は、看護師として働いていた。幾人もベッド上の患者さんを看てきたが、自分がそうなるとは。

食事、排せつ、体位変換、全て他人の手に委ねないといけない。看護師さんと呼ばないけれど忙しそうだ。さっきからナースコールが頻回に鳴っている。自分が仕事をしていた時を思い出す。「あーなんでこんなことに」。悲しくて

タオルで口を押さえて泣いた。眠れない夜だ。

「おはよう。眠れましたか」。明るい声が病室に入ってきた。看護師長さんだ。私は動かせない体がつらくて眠れないことを訴えた。師長さんは、「ここが痛いでしょ」と私の腰に手を入れてくれた。

(そう、そこ。なんで分かったのか、気持ちがいい)

思わず涙が出てきた。今まで我慢していたものがせきを切って流れ出した。なぜこんな体になってしまったのか、大きな声で泣いた。

師長さんは、私の腰をさすりながらじっと話を聞いてくれた。そして私の興奮が収まった時、こう言った。「元気な時の自分と比べたらだめ。事故直後

はどうだった? 今日とは昨日と比べてどう? 少しずつ良くなっている? 焦ったらだめ。一步一步よ」

確かにそうだ。見方を変えると不思議と気持ちが悪くなる。固まった体がほぐれていく。

あれから3年、看護師として復帰した。家に帰る患者さんの退院支援を行っている。どういう支援をしたら良いか、自分の経験を生かし考えることができる。暗闇の中の私を救ってくれたあの温かな手と、あの言葉で、私はもう一度白衣を着たいと強く願った。正直、前の体のようにはいかない。でも自分に言い聞かせている。「焦らず一步一步よ」。